

## サンフランシスコ日本町百周年について

田 中 泉\*

2006年4月20日から2007年3月31日までカリフォルニア大学バークレー校エスニック・スタディーズ学部（University of California BerkeleyのEthnic Studies Department）に客員研究員として滞在する機会をいただいた。

同大学は明治維新の1868年に開学した伝統校で、過去20名のノーベル賞受賞者を輩出したアメリカ屈指の名門校である。そして、エスニック・スタディーズ学部は、1960年代後半にアメリカ全土で盛り上がったマイノリティ運動の影響で設立された学部で、アジア系、ラテン系、アフリカ系および先住アメリカ人についての研究がなされている。研究テーマを「日系アメリカ人を中心とするアジア系アメリカ人の歴史と現在を日本の中学・高校生に教えるための教材開発」としていた私にとって、そこはまさにうってつけの学部であった。



<写真1> UCバークレー(セイザー門)

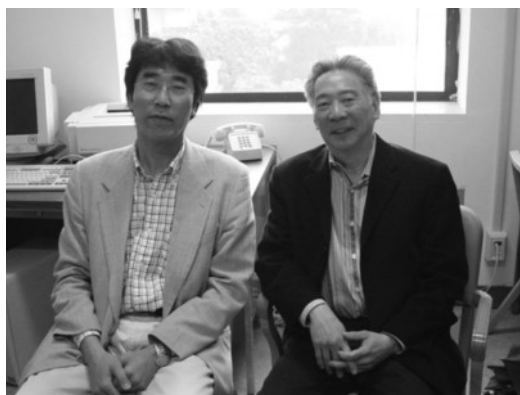


<写真2> エスニック・スタディーズ学部が入る建物

---

\* 広島経済大学経済学部教授

この学部では、スポンサーとなっていたマイケル・オミ准教授をはじめとして、マイノリティとしてのアジア系アメリカ人研究の第一人者ロナルド・タカキ名誉教授、日系アメリカ人史研究者のジェリー・タカハシ講師、女性移民論研究者の山中啓子講師などから親身なアドバイスをいただいた。山中先生を除く3名はいずれも日系3世であったが、ほとんど日本語は話せず、英語での会話であった。また、もっともよき相談相手になったのは、院生のウエスリー・ウエウンテン氏であった。彼は、ハワイ生まれのオキナワ系の日系アメリカ人3世で、かつて琉球大学に留学したこともあり、夫人が日本人であり、日本語も上手で、日本の事情にも通じていた。さらに、同じ客員研究員の立場で、台湾のユエン・リウ先生や、京都外国語大学の元山千歳教授、一橋大学の中井亜佐子助教授、そして上智大学大学院生の水谷裕佳さん、など多士済々に囲まれた研究生活であった。



<写真3> マイケル・オミ先生(右)と



<写真4> 研究室の仲間と

大学だけでなく、様々な幸運に恵まれた1年であった。凶らずも2006年は、サンフランシスコにある日本町（ジャパントウン）がその建設から百周年にあたる年であった。サンフランシスコは、1906年4月18日に大地震に襲われ、そのあとの火災によって中心部の建物はほとんど壊滅し、それまでサウス・オブ・マーケット（South of Market）やチャイナタウン（Chinatown）など市内の数ヶ所に分散して居住していた多くの日本人も家を失い、再建途上で1ヶ所にまとめて住むようになり誕生したのが現在の日本町の起源である。地域内には、日本町の核とも言えるジャパンセンター、ホテル、コミュニティセンター、日系市民団体の事務所、日本語補習校、シニアホーム、新聞社、仏教寺院、キリスト教会、映画館、日系マーケット、ピースプラザ、レストランなどの諸施設がある。

2006年、百周年を迎え、記念祝賀行事が1年を通じて行われ、筆者も参加することができた。この結果、当地の日系アメリカ人のコミュニティとその歴史について多くを知ることができるとともに、日本町が抱えている課題も知ることができた。

大きな行事として、まず、7月24日に記念シンポジウム「日系アメリカ人のアイデンティティの変化」が行われた。基調講演を行ったグレン・フクシマ氏が述べた「日系アメリカ人のアイデンティティは、アメリカ社会の多様さと同様に多様であり、一般化できない。戦時中に強制収容を体験した二世や三世は、アメリカへの忠誠心を強調して日本との心理的に距離を持ち、日本との交流に目立った活躍が見られなかったが、時間の経過とともに世代も交代し、四世や五世はグローバル化の進展という変化の中で日本に関心を持つようになっていく」という言葉が印象的であった。また、9月30日に行われたコミュニティ・ピクニックは、かつて、お寺や教会、県人会などが主催して頻繁に行われていたものを、復元してみようというもので、ゴールデンゲートパークに多くの人が集まった。私も、ある一家に招かれて参加したが、みな、家族ごとに料理を持ち寄り、思い出話に花を咲かせていた。かつてのピクニックのとおり、バンド演奏、子どものゲーム大会、料理コンテストなどがあり、大いに盛り上がった。

さらに、毎月、日本文化を共有するためのワークショップが、北カリフォルニア日系文化コミュニティセンターで開かれた。例えば、お正月、ひな祭りやこどもの日などの伝統行事、鯖ずし造りや蕎麦づくりなどの伝統料理講習、二世の主張や県人会の思い出話などである。10月には筆者もコーディネータのダイアン・マツダ氏に依頼され、「移民の故郷としての広島県」をテーマにプレゼンターを務めた。

日本町は、かつての繁栄した時代から比べると賑やかさを失っている。ジャパンセンターを歩いている人のほとんどは、周辺の町や日本からの観光客である。また、

ポスト街に並ぶ商店のうち半分近くは、日系資本ではない。商店やレストランの看板に書かれたハングルを見る限りその経営者が韓国系の資本になっていることは明らかである。

日本町に住む日系アメリカ人の多くは、日本町テラスのアパートやシニアホームに住んでいる二世を中心とした高齢者である。彼らは、日系マーケットで日用品の買い物をしたり、日曜日に寺院や教会に行ったり、行事に参加することが多いが、新たに大きな消費者となることはない。彼らの子や孫に当たる三世・四世・五世の多くは、日本町以外の場所に住居を持っている。三世以降の世代の日系アメリカ人は、生まれながらにアメリカの市民権を得て、学校では英語で学び、アメリカ社会の一員として暮らしている。その多くは、日本語を話さないばかりでなく、日系としてのアイデンティティも薄らいでいる。しかし、現在、四世や五世の若者の一部には、自分たちの日系アメリカ人としてのアイデンティティに目覚め、日本文化に興味を持ち、日本語を学ぼうとしている人たちもいる。このような人たちの変化の契機は、日本文化、特に、Jポップと呼ばれる現代日本の音楽、映像、アニメ、ゲームに触れることである。日本町でも日本からの輸入品を扱う書店やCD・DVDショップ、ゲームショップで彼らの姿を頻繁に見ることができる。筆者は、日本町の将来性がそこにあるのではないかと考える。

百周年の行事は、日本町の日系アメリカ人コミュニティの潜在力を示すものであったが、その一方で、日本町の核であるジャパンセンター内の2つのモールと2つのホテルが日本資本の近鉄エンタープライズ・アメリカ社からアメリカ資本の3Dインベスティメント社に売却された。売却契約において、最低5年間は日系文化を表現した現在の姿を保つこと、日系アメリカ人コミュニティの活動の場を保証することなどが取り決められたが、その後の保証はない。むしろ、日本町は日系文化を保持する努力に代わって、現在の日本の文化をアメリカに直接アピールする場として期待されているのかもしれない。

実際、ポスト街より北側のブロックの再開発の一環として、小学館 USA による J ポップセンターの建設が計画されている。そこには日本映画専門の映画館、書店、カフェなどが入居する予定である。工事は、2007年5月から約2年かけて進められる。また、売却された2つのホテルのうち、ミヤコ・インも、Jポップをテーマにしたものに改装される予定である。各客室の壁やロビーの天井には、日本人アーティストによるイラストが描かれ、ロビーの壁には、モニターが備えられ日本のアニメやミュージックビデオが映され、利用客がJポップの世界に浸れるようになるという。

以上見てきたように、サンフランシスコ日本町は、2006年の100周年を一つの区切りとして、日系アメリカ人が暮らした町として日系文化を保存する役割に加え、将来は、北カリフォルニアにおける日本文化の発信地として役割を担い、日系アメリカ人だけでなく、あらゆる民族グループの若者にそれをアピールすることで、多くの人が集まる町となることをめざしているようで、大いに期待したい。

#### [付記]

サンフランシスコ日本町百周年の記念事業およびジャパンセンターの売却問題の詳細な内容については、『広島経済大学創立四十周年記念論文集』（2007）所収の拙稿「北カリフォルニア日系アメリカ人コミュニティの最近の動向－サンフランシスコ日本町百周年とジャパンセンター売却問題－」に記述した。